様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：２３５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１０３４

研究課題名（和文）戦後恵那の生活綴方教育と石田和男の教育思想に関する総括的研究

研究課題名（英文）Research on Ishida Kazuo's Thought on Education and Review of Education of Writing about Life in Ena region

研究代表者
佐藤　隆（Sato, Takashi）

都留文科大学・文学部・教授

研究者番号：７０２２５９６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：子どもの学習意欲の低さが問題となっているが、解決する第一歩は子ども理解を深めることである。その試みの一つに「恵那の生活綴方教育」がある。それは作品分析を通じて、子ども理解を深めるものであった。また子どもにとっては、表現を通じて自らの生活を見つめ、生き方を考える役割を果たした。石田和男は、生活綴方教育の意義を探究し、発展させた。本研究は、彼の教育思想に着目することを通じて、子どもの学習意欲と生きる力の関係を検討した。
　さらに、生活綴方教育の発想と共通性を持つ世界の教育実践を検討するためにフレネ教育実験中等学校の調査を行った。この調査で、子どもへの表現の自由の保障が、学習を促進することを確認した。

研究成果の概要（英文）：Recently teachers and parents have been worried about less eagerness for learning between some of children. We recognize that solution of this problem is to deepen our understanding of children as a first step. Our research was focus on education of writing about life in Ena in Gifu prefecture. Education of writing about life in Ena was that teachers tried to understand children through their expressions. Moreover, children stared at their own lives and thought about their ways of living through writing about their lives. Kazuo Ishida who was a leader of teachers in Ena searched for the meaning of education of writing about life and built up it. Research on his practice and thought of education help us to understand relationship between eagerness for learning and willingness for life of children.
 In addition, we made a research tour to Freinet education system that attaches importance to individual expressions. In this research we observed freedom of expressions promoted learning.

研究分野：教育学

キーワード：生活綴方教育　子ども理解　教育課程　地域にねざす教育　表現の自由

１．研究開始当初の背景

(1) 生活綴方教育の現代的意義と可能性

①「学力低下」論をひきがねにした「新教育」批判がおきた 1950 年代初頭、無着成恭『山びこ学校』によって復興した生活綴方教育は大きな反響を呼び、生活記録運動など社会教育にも広がった。しかし、大田堯は「『山びこ学校』よりも恵那の方がすごいのです」と述懐している（日本教育学会『「戦後教育学の遺産」の記録』2013 年)。『山びこ学校』が社会的反響を呼んだ同時期、岐阜県恵那では若き小学校教師、石田和男による『夜明けの子ら ：生活版画と綴方集』が刊行された。戦後の生活綴方教育運動の全国的なスタートとなる第 1 回作文教育全国集会も恵那で開催された。大田堯、勝田守一ら教育学者は恵那を訪れ、戦後教育学の展開に恵那の教育は大きな影響を与えた。しかしながら戦後教育史の中で、恵那の生活綴方教育のもつ意味が十分に位置づけられているとは言えない。また当地に残されている膨大な資料も公刊されずに残されている。

②1960 年代、「科学と教育の結合」の論理によって系統的教科教育が主流になると、恵那でも生活綴方教育は後退した。しかし、高度経済成長を経た 1970 年前後、子どもの生活の激変のなか、系統学習による知識の生活的文脈の欠落が問われるようになった。そうした中、恵那では戦後直後初期の実践とは異なる新たな生活綴方教育が展開していく。この時期、恵那の生活綴方教育の創造的展開を中心的に担ったのも石田和男である。その石田に学びながら恵那の生活綴方教育の担い手となっていった丹羽徳子の実践記録『明日にむかって』（草土文化）は、1980 年代に全国的に注目され、多くの研究者、教師が再び恵那を訪れるようになった。しかし、1990 年代以降、恵那の教育の発展、継承が困難になり、今では恵那の教育が忘れさられようとしている。

③日本の戦後教育史のなかで生活綴方教育がどのように展開し、困難におちいったのか。今日の子ども・若者の学びへの意欲が見えにくい現状と、その経緯がどのように結びついているのか。恵那の生活綴方教育に即して、それらを明らかにし、生活綴方教育がこれからの教育を展望する上で、いかなる課題を提起しうるのか検討してみる必要がある。当事者が存命のうちに、資料整理とともに聞き取り調査をおこない、戦後教育史のなかでの「恵那の教育」の位置づけと意味を明らかにする研究が急務となっている。

(2)石田和男は、「恵那の教育」をリードした重要な理論家であり実践家である。石田の論文や発言は、恵那のみならず日本の教育実践や教育運動に大きな影響を与えてきた。一方、恵那地域の教師集団としての実践の高まりを重視した石田には、多数の論文･著書のほかにも、集団討議の素材として供するために、筆名や事実上無署名の著述・発言が多くある。これらを確定し、その全体像を明らかにする作業は、恵那の教育と生活綴方の現代的意義を明らかにする上で、不可欠のものであるが、高齢である石田からの聞き取りは急がなければならない。これらを含めて石田の業績を集約整理し検討する必要がある。

(3)近年諸外国の教育実践・教育研究もいじめ、怠学、自己否定感など Child Problem への対応に「子どもの声を聴く」ことへの関心が高まっており、教師の力量の重要な要素として位置づけられている。この動向を反映して、子どもの「物語」と学校の「物語」の緊張関係と相互理解の契機を探ろうとしている Narrative Inquiry(J.D.クランディニン)や子どもの想像力や物語を学習の原動力と見なしてその表現を励まそうとする Imaginative Education（K.イーガン)、自由作文などを通して自己・他者理解を深めようとするフレネ学校での実践等の研究も進んでいる。これらの研究と実践に、我々共同研究グループは、生活綴方教育との共通点を見出しながらも、双方に共通する言語・概念の形成には至っていないのが現状である。この点で本研究には生活綴方教育の可能性が、国際的に認知される端緒を開くことが求められている。

２．研究の目的

戦後の「恵那の生活綴方教育」の中心的担い手であった石田和男のこども論・教育論を総括的に検討し、以下の研究課題を探求する。

(1)「学習意欲の低さ」や「いじめ問題」が深刻となっている中、生活の事実と学習を結びつけ本音で話し合うことを追求する生活綴方教育の現代的意義と可能性を明らかにする。

(2)岐阜県恵那地域の生活綴方教育の理論的支柱であった石田和男の著述・発言を収集し、その実践と理論の軌跡を明らかにし、生活綴方教育の発展にどう貢献を果たしたかを検討する。

(3)生活綴方教育の現代的意義に照応する世界の教育実践・思想を比較することによってその独自性と普遍性とは何かを明らかにする。

３．研究の方法

（1）石田和男の著書、論文、講演記録等を収集・整理して、それらを網羅した著作リストを作成するとともに、著作・論文等を分析し、石田和男の教育思想を検討した。

（2）上記の研究方法をもとに、現代における生活綴方教育の意義を検討し、生活綴方教育が「子ども理解」という臨床教育学のルーツの一つであるということを確認した。

（3）石田の教育思想のなかでも、重要な位置づけが与えられている「子どもの自由な表現」、「学びの協同化」「教師の専門性」の意味を探究するとともに、それらが国際的な教

育実践の中でどのように位置づけられているのかを確かめるために、フランスにおけるフレネ中等教育実験プログラムとフィンランドにおける近年のカリキュラム改革の実態を調査した。

４．研究成果

(1)研究代表者の佐藤隆は、戦後日本の教育のなかで生活綴方教育がどのような役割を果たしてきたのかを教育実践史として明らかにした。また、高度成長期に国民教育運動が「学力保障」論に傾斜していったのに対して、それとは異なる方向を目指した恵那の運動と教育実践を分析した。さらに、生活綴方教育の原点でもあり、現代における教育諸課題へのアプローチの鍵となる「子どもの声を聴く」ことの意義と、教師の専門職性の関係を､国内外の取り組みから検討した。また、フランスを中心とするフレネ教育は、子ども・若者の自己表現を励まし、それを通じて子ども・若者の自己認識と関係づくりに取り組んでいる。この取り組みを調査・検討した結果、教師たちの協働が教育実践を支える基盤として構想されており、その相互浸透性についての研究は教育実践概念を拡張・富裕化させるうえで重要であることを確認した。

(2) 森田道雄は、石田をはじめとする恵那の教師たちからの聞き取りを重ね、恵那の教育実践を総合的に研究した。とりわけ 50 年代の恵那教育会議の特質が、60 年代～90 年代の教育実践の基盤となっていることを明らかにし、「恵那の教育」とよばれて、この地の教育実践が全国的に認知されるのは 1970 年代ではあるが、子どもの生活とそこに生まれる表現を重視した生活綴方教育を軸とした教師集団による教育実践は 50 年代から展開されていたと結論した。さらに、地域の名を冠する集団的教育実践が長期にわたって展開された事例は、日本の教育実践史上ほとんど類を見ないことを確認した。

(3) 佐貫浩は、本研究課題のなかでは、戦後の「恵那の生活綴方教育」の担い手の一人であった石田和男の著述・発言の収集を中心的に担い、石田が生活綴方教育の発展にどう貢献したのかを検討した。その結果、石田は 1950 年代から 60 年代にかけては組合運動のリーダーとして「転換の方針」と名づけた運動方針の下で恵那の教師達に「自由論議」の重要さを説き、また 70 年代以降は、生活綴方教育の発展のための理論的問題提起を行い、それを恵那の教師達の「共同の事業」として進める必要性を訴えたことを明らかにした。この点で、石田和男という希有な実践家・理論家抜きに「恵那の教育」を語ることはできないことを再確認した。

(4) 片岡洋子は、生活綴方研究を土台にした教育実践研究や、子どもの人間関係の不自由さに言及しつつ教師やおとながどのようにかかわるべきかを検討した。とりわけ本課題研究のなかでは現代社会における若者の自己肯定感の低さと、自身の生活上の問題を綴り語り合う経験や文化としての「生活綴方」の欠如がどう関係しているかを明らかにすることを目的として①表現と語り合いが時代によってどう変容したか、②生活綴方教育における「自由」とは何か、に着目して分析することを通して、子ども青年の生きづらさをどう解きほぐしていくのかという課題に応えようとした。

(5)研究代表者並びに研究分担者の各自の本課題研究における成果は以上の内容であるが、共同研究の直接的な成果として、上記メンバーが中心となって作業にあたった『石田和男教育著作集』全 4 巻（石田和男教育著作集編集委員会編、花伝社）を刊行することができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 17 件）

①佐藤隆 「現実と向き合う「教師教育改革」を」、教育、7 月号、査読無、2016 年、pp59-67

②森田道雄「1990 年代の恵那教育研究所と教育実践（６）－石田和男の生活綴方論の到達点－」、『福島大学人間発達文化学類論集』、第 22 号、査読無、2016 年、pp113-128

③佐貫浩「岐阜県恵那の教育運動の展開と戦後教育学―石田和男の教育運動と実践の理論の展開に即して――＜その３＞ 「子どもをつかむ」方法と思想の展開」、『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、No13、査読無、2016 年、pp175-204

④片岡洋子「中学生をおとなにしていく教育課程づくり」、『生活指導研究』、No.33、日本生活指導学会、査読無、2016 年、pp67-71

⑤佐藤隆「教育の非人間化をのり越える戦略」､『教育』､1 月号､査読無､2015 年､pp5-12

⑥佐藤隆「教育は自由の空気のなかでこそ」、『教育』、8 月号、査読無、2015 年、pp57-64

⑦佐貫浩「人間の尊厳を実現する教育目的のあり方を問い直す」、『教育』、8 月号、査読無、2015 年、pp49～56

⑧片岡洋子、和井田節子「子どものケアと支援に関する研究報告」、『東日本大震災と教育に関する研究（全体編その２）』、日本教育学会、査読無、2015 年、pp275-305

⑨片岡洋子「子どもが自分を形づくっていくための教育を」、『教育』、12 月号、査読無、2015 年、pp45-49

⑩片岡洋子、久冨善之、教育科学研究会編「子どもの権利と民主主義 子どもの声に耳を傾けること」、『教育をつくる 民主主義の可能性』、査読無、2015 年、pp82-93

⑪佐藤隆「教師として変革期を生きる」、『教

育』、6 月号、査読無、2014 年、pp63-70
⑫森田道雄「1990 年代の恵那教育研究所と教育実践（５）」、福島大学人間発達文化学類論集、第 19 号、査読無、2014 年、pp53-70
⑬森田道雄「恵那の教育を牽引し続けた 24 歳の実践記録 石田和男『夜明けの子ら』」、『戦後日本の教育と教育学 別巻』、2014 年、pp226-229
⑭佐貫浩 「教育の場に民主主義と「人間」を取り戻す」、『教育』8 月号、査読無、2014 年、pp63-72
⑮佐貫浩 「岐阜県恵那の教育運動の展開と戦後教育学 石田和男の教育運動と実践の理論の展開に即して」、法政大学キャリアデザイン学部紀要、No11、査読無、2014 年、pp69-107
⑯片岡洋子「子どもたちが語る 3.11－大震災後を生きる子どもと教育を考える－」、日本教育学会モノグラフ・シリーズ No5、査読無、2014 年、pp203-215
⑰片岡洋子「「家庭科女子のみ必修」は、なぜ問題にならなかったのか」、田中孝彦・佐貫浩・久冨善之・佐藤広美編『戦後日本の教育と教育学』、査読無、2014 年、pp172-193

〔学会発表〕（計 2 件）
①片岡洋子「自由教育の現代的展開の可能性～フレネ教育と生活綴方に即して～」、フレネ教育研究会、2015 年 8 月 2 日、和光小学校（東京都世田谷区）
②片岡洋子・和井田節子「子どものケアと支援に関する研究－被災地の学校の教育実践および支援の実態調査をとおしてー」、日本教育学会第７４回大会、2015 年 8 月 30 日、お茶の水女子大学（東京都文京区）

〔図書〕（計 1 件）
①佐貫浩 『道徳性の教育をどう進めるか 道徳の「教科化」批判』、新日本出版社、2015 年、239 ページ

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
佐藤　隆　（Sato, Takashi）
都留文科大学・文学部・教授
研究者番号：70225960

(2)研究分担者
森田　道雄（Morita, Michio）
放送大学・福島学習センター・特任教授
研究者番号：40109236

佐貫　浩（Sanuki, Hiroshi）
法政大学・キャリアデザイン学部・教授
研究者番号：60162517

片岡洋子（Kataoka Yoko）
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：80226018

(3)連携研究者

(4)研究協力者
坂元忠芳　（Sakamoto Tadayoshi）
東京都立大学名誉教授